

Title	ニーチェにおける<重力の魔>について : 神なき時代の神
Sub Title	Über „den Geist der Schwere" bei Nietzsche : Der Gott des gottlosen Zeitalters
Author	辻本, 勝好(Tsujimoto, Katsuyoshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1990
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.56, (1990. 1) ,p.83- 101
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00560001-0209">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00560001-0209</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ニーチェにおける〈重力 の魔〉について

——神なき時代の神——

辻本 勝好

## 1. 神の死と神の影

ニーチェは、「神は死んだ。」と言って、それが支えるキリスト教道徳に對して無効宣言した。これまで生存に意味と目標を与えて来た、キリスト教の神は死んだ。自己の生存の座標軸である神を失った人間は、すでに虚無の深淵の中にある。この深淵の中であって、近代ヨーロッパ人は、もはや無効となったキリスト教道徳にしがみついて、自己の生を虚偽や偽瞞の中で下降させるようなことがあつてはならない。むしろ神の死とそれによって招来されたニヒリズムを直視し、新たな生の指針を模索すべきだ。この生の指針となり得るものが、《超人》や《永遠回帰》や《一切価値の転換》といった一連のニーチェの思想なのであり、彼の理想的分身であるツァラトゥストラは、まさにそうした思想の体現者なのであった。

神の死についてのニーチェの報告は、『華やぐ知慧』(1882)アフォリズム125<sup>1)</sup>に見出される。——「氣違いじみた男」が真つ屋間、提灯ちようちんをつけて、広場に出て来て、「おれは神様を探している！ おれは神様を探している！」と叫んだ。広場にはちょうど神を信じない人々が大量集まっていたから、たちまちひどい物笑いの種となった。神様が行方不明になったのか。神様が子供のように迷子になったのか。それとも隠れん坊をしているのか。われわれが怖くなったのか。船に乗っていったのか。移民というわけか。こ

のように、人々は口々に叫び、笑った。「氣違いじみた男」は彼らのなかに飛び込んで、するどい目つきであたりを睨めまわした。

「...《神様がどこへ行つたって?》と、かれは叫んだ、《諸君に言うてやる! おれたちが神様を殺したのだ——諸君とおれが。おれたちは全部神様の殺害者だ! だが、どうしてそんなことをやってのけた? どうしておれたちは海を呑みほすことができた? 水平線を拭きけすような海綿を、誰がおれたちにくれた? 地球を太陽から切りはなすようなどんなことをおれたちはやってのけたのだ? 地球はいまはどっちへ動いていくのか? おれたちはどっちへ動いていくのか? すべての太陽から離れてか? おれたちはたえず突進していくのではないか? それも後へか、横へか、前へか、四方八方へか? おれたちは無限の虚無のなかを迷っていくのではないか? むなしい虚空がわれわれに息を吐きかけているのではないか? 冷えてきたのではないか? たえず夜が、いっそう暗い夜がやってくるのではないか? 真昼間から提灯をつけなければならぬのではないか? 神様を埋める墓掘り人どもの騒ぎがまだ聞こえてこないか? 神様の腐る臭いがまだしてこないか? ——神様もまた腐る! 神様は死んだ! 死にきりだ! そしておれたちが神様を殺したのだ! おれたち——すべての殺害者中の殺害者たるおれたちは、どうして心を慰める? 世界がこれまでに持った最も神聖な、最も強力な存在、それがおれたちの七首かいくちにかかって血を流したのだ、——誰がこの血をおれたちから拭き取ってくれる? どんな水でおれたちは身を清めることができる? どんな贖罪の式、どんな祭りをおれたちは発明しなければならぬだろう? こうした行為の偉大さは、おれたちには偉大すぎはしないか? こうしたことをやってのけるというには、少くともおれたち自身が神々にならなければならないのではないか? これより偉大な行為はかつてなかった、——そしておれたちのあとから生まれてくるものはみな、この行為のおかげで、これまでにあったすべての歴史より一段高い歴史に属することになる!》——ここで氣違いじみた男は沈黙してふたたび聴衆の顔を見た。聴衆もまた沈黙し、怪しんで、かれをみつめた。ついにかれはその提灯を地に投げ打ったので、それは毀れて、消えた。《おれは早く来すぎた》と、かれは言った、《まだその時でなかった。この恐るべき出来事は目下進行中なのだ——まだ人間たちの耳には、はいつて来ていないのだ。電光と雷鳴は

時を要する、星の光も時を要する、行為も時を要する——実際に起こった後で、やっと人の目に入り、耳に入る——。この行為は、かれらには、最も遠い星よりも遠いのだ、——にもかかわらず、かれらはこの行為をやったのけたのだ!」——さらに人の噂では、気違いじみた男は同じ日に、あちこちの教会に闖入し、そこでかれの《神の永遠鎮魂曲》を歌ったということだ。外へ引きずり出され、詰問されると、いつもただこう答えたということだ、——《教会とはいったい何だろう、——神の墓穴、その墓碑でなければ?》

ここに至って、神の死、すなわち近代人の無信仰の帰結としての神の殺害、それによって招来された虚無の深淵、安易な無神論の満足から来る近代人の無自覚が、「気違いじみた男」の口を借りて実に見事に表現されている。なお、ここで注意していいのは、この「気違いじみた男 (der tolle Mensch)」が、「前段階」<sup>2)</sup>では「ツァラトウストラ (Zarathustra)——くくは編者による補填)」になっている点だ。そもそも『華やぐ知慧』は、第五書 (1887) を含めると、『ツァラトウストラ』(1883-85) にまたがって成立している。従って、ここでの神の死のモチーフは、第五書ばかりでなく、『ツァラトウストラ』にも接続している。その点を踏まえつつ、神の死についてさらに考察していくことにしよう。

神の死=神の殺害が、近代人の無信仰の帰結であることは、すでに述べた。繰り返して言うが、近代人は、その安易な無神論のうちにもはや自己の生存の意義を問うことなく、あいかわらず小市民的な幸福を追求し、神が死んで形骸化したキリスト教的市民道徳を信奉している。それほどまで近代人は、神の死による生存の意味喪失ジョン・ロージカイトに対して無自覚・無反省になっているのだ。それゆえ、神の死についてのニーチェの報告を、究極の実在たる神についての形而上学的な思索だなどと考えるはならない。それは、あくまでも彼の同時代のヨーロッパ文化の診断なのである…。

仏陀が死んだ後、人々はなお数世紀にわたって、とある洞窟のなかにかれの影を、巨大な恐るべき影を示したという<sup>3)</sup>。それを受けてニーチェは言う、「神は死んだ、——しかし人の世のこととて、おそらくなお数千年に

わたって、神の影が指し示される多くの洞窟が存在するであろう。——そしてわれわれは——われわれはまた、この神の影にも打ち勝たなければならない!<sup>4)</sup>と。キリスト教の神が死んだ以上、その支えを失ったキリスト教道徳も、本来的には死滅するはずである。しかし、それは延命した。というのも、ニーチェに言わせれば<sup>5)</sup>、「キリスト教の安楽死」は、キリスト教の、穏和な道徳主義への転化が原因だからである。「神の影」は、この穏和な道徳主義としてのキリスト教的市民道徳のうちにお生きつづけているのだ。かくしてニーチェは、「神の影」(レーヴィットの言葉を借りて言えば<sup>6)</sup>、「死せる神の、延命した道徳の、影めいた生存」に対する闘争において、近代人の安易な無神論を能動的なニヒリズムに先鋭化させて、受動的なニヒリズム(生のニヒリズム、すなわちデカダンス)に対する対抗手段にするのと同時に、近代人に形骸化したキリスト教的市民道徳にかわる新たな生の指針の必要性を痛感させようとしたのである。ということはすなわち、「神の影」に対する闘争によってキリスト教の神に通じる一切の逃げ道を塞いでしまおうというわけである。

## 2. ツァラトウストラと《重力の魔》

「神の影」に対する闘争は、『ツァラトウストラ』の中では、《重力の魔 (der Geist der Schwere)》に対するツァラトウストラの戦いに集約されている。『ツァラトウストラ』時代の「遺された断想」には、「ツァラトウストラにとって最大の困難になったものは何か? 古い道徳から自己を解放すること。」<sup>7)</sup>とあり、ここでも、延命した「古い道徳」のうちにお生きつづけている「神の影」に対する闘争が継続中であるのがわかる。しかも、「神の影」は、これを《重力の魔》(《重圧の霊》とも訳されている)として捉え直し、ツァラトウストラの宿敵として登場させることによって、より具体性を帯びたものになっている。それでは、《重力の魔》とはいかなるものなのか、『ツァラトウストラ』や同時代の「遺された断想」からの引用をまじえつつ説明していくことにしよう。

ニーチェは「遺された断想」の中で、「道徳は人間たちの間でこれまで

この世に存在する最も<sup>エルンスト</sup>厳粛なものとなみなされて来た。」<sup>8)</sup>と書いている。この<sup>エルンスト</sup>厳粛というものが、いわば宗教や道徳の根幹をなしているわけだ。「重力の魔」は、何よりもまずこの厳粛そのものに他ならない。

「わたしがわたしの悪魔を見たとき、悪魔は<sup>エルンスト</sup>厳粛で、徹底的で、深く、荘重であった。それは重力の魔であった。——かれによって一切は落ちる。/ 怒っても殺せないときは、笑えば殺すことができる。さあ、この重力の魔を笑って殺そうではないか!」<sup>9)</sup>(第一部「読むことと書くこと」)

ここでは、「厳粛で、徹底的で、深く、荘重 (ernst, gründlich, tief, feierlich)」という類語反復によって、「重力の魔」の厳粛が強調されている。その厳粛の対極をなすのが笑いだ。笑いは厳粛をこわし、「重力の魔」を殺す。ニーチェ的な笑いは、このこわすという形で作用している。厳粛については言うに及ばず、意味や論理や文法をこわし、従来の価値や真理を相対化し、何ものにも囚われぬ精神の自由を保証するのが、ニーチェ的な笑いなのだ。従って、ここでのツァラトストラの笑いも、新しい価値の創造のための価値破壊という点に重きをなしており、『ツァラトストラ』のプランの中には、「笑いの神聖化。舞踏の未来。重力の魔に対する勝利。」<sup>10)</sup>とあるように、ツァラトストラの笑いが、舞踏とともに、「重力の魔」に対する優越となって現われているのがわかる。このような関連において、ツァラトストラは、先の引用の直前の個所で、「わたしは踊ることのできる神だけを信じるだろう。」<sup>11)</sup>と言っている。この「踊ることのできる神」とはディオニュソスのことであり、ディオニュソスの弟子として、ニーチェは、『ツァラトストラ』において、厳粛な「重力の魔」に対する勝利によって従来の宗教にかわる舞踏と笑いの宗教とも言うべきものを確立しようとしたのである<sup>12)</sup>。そのことは、『ツァラトストラ』という作品全体が聖書のパロディー<sup>13)</sup>になっていることから明らかであり、パロディーというものが「一切価値の転換」を意味することを考慮に入れば、ツァラトストラはイエス・キリストに対応し、「重力の魔」は

キリストを誘惑する悪魔に対応している。そして新約聖書における、悪魔によるキリストの誘惑の場面对応しているのが、ツアラトゥストラが船上で勇敢な船乗りたちを相手に自分の見た幻影と謎について語るという形式をとった、第三部の、「永遠回帰」の真理をめぐる「幻影と謎」の章<sup>14)</sup>なのである。

ツアラトゥストラは、いつのことか、<sup>しかばね</sup>屍色したたそがれのなかを、陰気に、非情に、唇をかみしめて歩いていた。彼は荒涼とした山道を、ひたすら黙々と、ひややかにきしむ小石を踏みしめ、また足もとを危うくする<sup>いしくれ</sup>石塊を踏みしだくようにして、上へ、上へと努力してのぼって行く。「上へ。——わたしの足を下へ、深みへと引きおろすもの、わたしの悪魔であり、宿敵である《重力の魔》にさからって。」ツアラトゥストラの肩のつた《重力の魔》はなかばは小びと、なかばはもぐらで、自分も<sup>あしな</sup>足萎えなら、ひとの足も萎えさせる魔もので、たえずツアラトゥストラの耳から脳髄に「鉛のような思想のしずく」<sup>したた</sup>を滴らせて、彼の上昇の意志をはばもうとする。

「おお、ツアラトゥストラよ！」と、かれ（《重力の魔》）はあざけるように一語一語をくぎって、ささやいた、「あなたは知恵の石だ！ あなたはあなた自身を高く投げた、しかし投げられた石はすべて——落ちる！ / あなた自身のところへもどり、あなた自身を石打ちの刑罰にあわすさだめなのだ。ツアラトゥストラよ、あなたはほんとに遠くまで石を投げた、——だが、あなたの頭上に、それはふたたび落ちてくるだろう！」<sup>15)</sup>（「幻影と謎」一）

このような《重力の魔》の思想は、明らかにニュートンの《万有引力の法則》からの発想にもとづく、因果応報の思想である。いやそればかりか、《重力の魔》そのものが、文字通り、因果応報の思想であり、因果律ないし根拠律に近いと言える。《重力の魔》は、ツアラトゥストラの上昇の意志をはばみ、萎えさせるために、みずから彼の肩ののり、彼に因果応報という重圧を加えようとする。しかし、因果応報に恐れをなしていて

は、彼の上昇の意志がめざす《永遠回帰》の思想、すなわち、一切の出来事や思念やためらいが、この今の瞬間を含めてそっくりそのまま無限回にわたって繰り返される<sup>16)</sup>という恐るべき深淵の思想に堪えることはできないし、身の破滅を招くだけだ。身の破滅から救うものは、死をも打ち殺す勇氣しかない。それはたんなる紛<sup>ま</sup>らわしでなく、死の恐怖をとりこんで笑う勇氣、「これが生きるということであったのか？ よし！ もう一度！」<sup>17)</sup>と言う勇氣がある。ツァラトウストラはそのような勇氣に促されて、「重力の魔」にむかって、「小びとよ！ おまえか！ それとも、わたしか！」<sup>18)</sup>と言って二者択一を迫り、さらに《永遠回帰》の思想について語る段になって、この二者択一が逆転して、「わたしか！ それとも、おまえか！」<sup>19)</sup>と言う。後者の二者択一は、因果応報といった因果律ないし根拠律を代表する《重力の魔》に対する、《永遠回帰》の思想を代表するツァラトウストラの優越の表明なのだ。

「とまれ！ 小びとよ！」とわたしは言った。「わたしか！ それとも、おまえか！ しかし、二人のうちで強い者はわたしだ——。わたしの深淵の思想を、おまえは知らぬ！ かかる思想に——おまえは堪えることができなだろう！」——<sup>20)</sup>（「幻影と謎」二）

《重力の魔》が《永遠回帰》の思想に堪えることができないのは、彼が《永遠回帰》の思想から輪廻の思想を連想してしまうからだ。彼にとって問題となるのは、輪廻の思想にもとづく因果関係であって、そこからは、《永遠回帰》の思想を肯定するために今をいかに生きるかという積極的な問いは出て来ない。従って、彼の時間把握、「直線をなすもは、すべていつわりなのだ」「すべての真理は曲線なのだ。時間そのものもひとつの円形だ。」<sup>21)</sup> という時間把握も、結局のところ、輪廻の世界の時間であって、時間は現在という瞬間を結節として円環をなしており、瞬間そのものも永遠にめぐり戻って来るといふ《永遠回帰》の時間ではないのである。その後展開される《永遠回帰》のヴィジョンについては、すでに別稿で論じたので、重複を避けることにして、さらに《重力の魔》について考察して



いくことにしよう。そこで重要となるのが、第三部の「重力の魔」の章である。

「とりわけ、わたしが重力の魔を敵視していること、これこそ鳥の生きかたなのだ。まことに、それは不倶戴天の敵、宿敵だ。根っから許せない敵だ！おお、わたしの敵意の飛翔と彷徨がいまだ及ばなかったところがあるか！」<sup>22)</sup>（「重力の魔」一）

人間が神や彼岸といった超地上的存在ではなく大地の意義を汲み取り、大地に忠実に生きること、これが人間に対するツァラトウストラの要請である。しかし、大地にしがみついているのは、人間は自己を超克して超人になることはできない。人間はいつかは、自由と自律の象徴たる鳥のように軽快そのものになって、大地から飛翔しなければならない。このような人間の上昇の気運をさまたげているのが、「重力の魔」なのだ。

「人間にとっては大地も人生も重いものなのだ。それは重力の魔のしわざである！しかし軽くなり、鳥になりたいと思う者は、おのれ自身を愛さなければならない、——これがわたしの教えである。/愛するといっても、もちろん病者の愛をもってではない。... /ひとは自分自身を、すくすくとした健康な愛によって愛することを学ばなければならない。自分自身を失わず、あたりをとみこうみしないために。/そのような、とみこうみがみずから称して《隣人への愛》というのである。この言葉ぐらいこれまでに嘘と偽善のために役だった言葉はない。... /そしてまことに、自分を愛することを学ぶということ、これは今日明日といった課題ではない。むしろこれこそ、あらゆる修行のなかで最も精妙な、ひとすじなわでいかない、究極の、最も辛抱のいる修行なのだ。/なぜなら、ほんとうの自分のものは、自分の手がたやすくとどかぬように、たくみに隠されているからである。地下に埋もれた貴重な鉦脈のなかで、自分の鉦脈がいちばん遅く発掘される、——これも重力の魔のしわざである。」<sup>23)</sup>（「重力の魔」二）

ツァラトウストラが「おのれ自身を愛すること」と言った場合の「おのれ自身 (sich [selbst])」は、意識や自我のレベルを超えている。ニーチェ

は、すでに『ツァラトゥストラ』第一部「身体の軽蔑者」の章の中で<sup>24)</sup>、精神とか感覚とかいった意識から来る「自我 (das Ich)」の奥底に、さらに創造主体たる本物の「おのれ (das Selbst)」が存在するのを認め、そう認めることで物自体やたんなる精神だけの世界を否定し、身体、すなわち大地や生に根ざした世界を肯定しようとしている。従って、人間がかかる世界を肯定し、本源的な生を生きるためには、何よりもまず本物の「おのれ」を発見し、かつ愛さなければならない。しかし、「重力の魔」は、「自我」の成立基盤である人間の意識に介入することによって、人間の大地や生を重くし、人間からその本物の「おのれ」を隠し、人間を自律的でなく他律的な存在に引き下げて、重くなった大地に縛り付けようとしているのだ。それでは、「重力の魔」は何によって人間の意識に介入するのであるうか。

「ほとんどゆりかごのなかから、われわれにもろもろの重い言葉と価値が与えられる。《善い》と《悪い》——この贈り物を手にして、われわれは世の中に生きることを許される。」<sup>25)</sup>（「重力の魔」二）

これを読めば、「重力の魔」の、人間の意識への介入が、言葉によるものであるのがわかる。善悪は言葉によってつけられる。われわれは善悪を知らなくて、社会生活を営むことはできない。それほどまでに善悪、すなわちここではキリスト教的市民道徳は、近代ヨーロッパ人が社会生活を営む上で大きな強制力を持っており、神が死んで形骸化したと言っても、言葉、ひいては文法（言葉から意味が生じ、論理が生じる。論理は文法に基づく言葉によって構成される。）がなくならない以上、依然として支配的でありつづけることになるのだ。言葉・意味・論理・文法は、いわば人間が人間であるための必要不可欠な条件である。「重力の魔」は、そうした人間の条件を振りかざすことによって、人間を古い道徳、すなわち神が死んで形骸化したキリスト教的市民道徳によって重くなった大地に縛り付け、人間から自由と主体的決断を奪おうとするのだ。ということはすなわち、「重力の魔」そのものが、死んだ神に代わって、近代ヨーロッパ人を

キリスト教的市民道徳につなぎとめるもの、より具体的に言えば、因果律ないし根拠律、人間の条件を満たす文法なのだ。そのような意味で、ニーチェ自身、「われわれは危惧する、われわれが神を捨てきれないのは、われわれがいまだに文法を信じているからではないのか」<sup>26)</sup>と言っている。人間が《重力の魔》を倒し、文法を否定すれば、その人間は善悪の彼岸にむかい、超人に一步近づくことになる。しかし、彼はあつした人間の条件を一挙に失い、全くの無政府状態に陥ることになるだろう。従って、《重力の魔》の殺害は、ニーチェの理想的分身たるツァラトゥストラにとっては可能でこそあれ、人間にとって可能なのは、《重力の魔》との対決を通じて、失われた自由と主体的決断を取り戻すくらいのことである。そのためにツァラトゥストラは、《重力の魔》が創造した善悪に対して、人間がおのれの善悪を主張し、《重力の魔》の干渉を受けない本物の「おのれ」たる自分自身を発見するように説いている。

「人間は容易に発見されない。ことに自分自身を発見するのは、最も困難だ。精神が心について嘘をつくことがしばしばある。こうしたことになるのも、重力の魔のしわざである。/だが、つぎのように言う者は、自分自身を発見した者といえる。——《これはわたしの善だ。これはわたしの悪だ》と。かれはこう言うことによって、《万人に共通する善、万人に共通する悪》などと言うもぐらにして小びと(《重力の魔》のこ)を沈黙させた。」<sup>27)</sup> (「重力の魔」二)

「精神」が「心」について嘘をつくことがあるのは、意識や自我に属する「精神」が《重力の魔》の干渉を受けて、身体や本物の「おのれ」に属する「心」を見失ってしまうからだ。《重力の魔》は、そのような、「心」と通じ合うことのない「精神」を通じて、近代ヨーロッパ人にキリスト教的市民道徳を強要しようとするのである。いずれにせよ、《重力の魔》は、因果律ないし根拠律、人間の条件を満たす文法として人間の意識や自我の中に深く喰い込んでいる以上、人間にとっては一筋縄ではいかない存在なのだ。

人間にとっては一筋縄ではいかない《重力の魔》も、善悪の彼岸にある

ツァラトゥストラにとっては、自己の優越を喚び起こしてくれる相手に他ならない。《重力の魔》に対するツァラトゥストラの優越は、すでに述べたように、笑いと舞踏に現われている。そのことをよく表わしているのが、第三部「古い石の板と新しい石の板」<sup>28)</sup>の中の一文である。この章においてツァラトゥストラは、既成の価値を録した「古い石の板」を打ち砕き、それに代わる新しい価値を「新しい石の板」に刻もうとする。そこでツァラトゥストラはまず、既成の価値を創造した者、それに奉仕する者、あぐらをかく者たちに嘲笑をあげることから始める。

「...—かれらの最大の善も、なんと小さなことか！かれらの最大の悪も、なんと小さなことか！—そう言って、わたしは笑った。このようにわたしの内部から、わたしの聡明なあこがれが叫び、笑った。このあこがれは山中で生まれたもの、まことに荒々しい知慧だ！—その翼をはばたかすわたしの大なるあこがれは！/しばしば、このあこがれは笑いのさなかに、わたしを引きさらい、高く、遠く、運んでいった。わたしはおのきながらも一本の矢となり、太陽に酔いしれた恍惚を貫いて飛んだ。/—どんな夢もまだ及んだことのない遠い未来へ、どんな芸術家が夢想したよりも熱い南国へ、神々が舞踏し、衣をまとうことを恥とするかなたへ。—/...そこでは、わたしはわたしの昔なじみの悪魔であり宿敵である重力の魔やかれが創造した一切のものにふたたびめぐりあった。すなわち強制、規定、必要、目的、意志、善悪などにも。—/なぜなら、踊るには、何か踏まれるもの、踏みすてられるものがなくてはなるまい？軽快な者、最も軽快な者たちがあるためには—もぐらども、重い小びとどもも存在しなくてはなるまい？」<sup>29)</sup>（「古い石の板と新しい石の板」二）

ツァラトゥストラの笑いは、一切の価値や真理を相対化してしまう否定的・破壊的な笑いである。さらにそれは、キリスト教的市民道徳の根幹をなす、《重力の魔》の厳肅<sup>エロースト</sup>をこわし、《重力の魔》を殺すための手段でもあった。他方、舞踏は全体的に見て生の軽快さや生きることのよこびの象徴になっている。《重力の魔》によって創造された「強制、規定、必要、目的、意志、善悪」に人間が従属する世界では、ツァラトゥストラの笑い

は、そういったものに対して否定的・破壊的ではあるが、彼の大きいなるあここがれが笑いのさなかに彼を運んで行った善悪の彼岸では新しい価値の創造のための価値破壊として肯定的・建設的なものとなり、「重力の魔」を踏みつけるための舞踏が行われる。このように、笑いとは舞踏は、ここでは「重力の魔」を倒し、否定の世界を肯定の世界に変える契機になっており、「重力の魔」も、彼が創造した「強制、規定、必要、目的、意志、善悪」も、ツァラトゥストラにとっては今や見下すべき対象、いわば「重力の魔」に対する自己の勝利の記念碑にすぎないのである。

### 3. 因果律ないし根拠律について

ニーチェの、「神の影」に対する戦いは、『ツァラトゥストラ』に至って、ツァラトゥストラの、「重力の魔」に対する戦いに集約され、決着を見たかのように思われるが、「重力の魔」の正体が人間には克服され難い因果律ないし根拠律、ひいては文法である以上、それ以後もなお継続中であると言える。事実また、「重力の魔」の問題は、『ツァラトゥストラ』以後の、『善悪の彼岸』(1886)に始まる諸著作、とりわけ『偶像の黄昏』と『アンチキリスト』(1888)においてその正体そのものがニーチェの執拗な批判にさらされ、「従来の諸価値そのものの価値転換、大きいなる戦い——決着をつける日と呼び出す作業」<sup>30)</sup>が行われている。従って、『ツァラトゥストラ』全体を貫いている「笑いの神聖化。舞踏の未来。重力の魔に対する勝利。」<sup>31)</sup>という一プランは、実現されることのなかった「一切価値の転換の試み」の後にはじめて現実味を帯びるはずであったところの、未来のヴィジョンだったのである。そこで、ニーチェは「重力の魔」の正体であるところの因果律ないし根拠律、または文法についてどのように論じているのか、それを次に見て行くことにしよう。

因果律 (das Gesetz der Kausalität) を含む根拠律 (der Satz vom Grund) の意味するところは、「何ものも根拠のないものは存在しない (Nihil est sine ratione. Nichts ist ohne Grund.)」ということであり、さらにこれを換言すれば、「存在する一切のものは一つの根拠を持つ (Omne ens habet

rationem. Jedes Seiende hat einen Grund.)」ということである。例えば、キリスト教道徳が存在するためには、その根拠 (Grund) ないし理性 (ratio) となるキリスト教の神が存在しなければならないということになる。ところが、その神は死んだ。しかしそれでもなお、キリスト教道徳が市民道徳として形骸化しつつも存続しているのには、何か別の根拠ないし理性があるはずだ。その別の根拠ないし理性を、ニーチェは『偶像の黄昏』の中で文法 (Grammatik) というものに求め、「言語における《理性》。おお、なんと老いた女詐欺師であることか！私は危惧する、われわれが神を捨て切れないのは、われわれがいまだに文法を信じているからではないのか」<sup>32)</sup>と書いている。「言語における《理性》」たる文法が「老いた女詐欺師 (alte betrügerische Weibsperson)」であるのは、言葉それ自体にすでに形而上学的概念が忍び込んでいて、一切の事物についての原因と結果を見誤らせてしまうからだ。

「…言語はその発生からして心理学の最も未発達な形式の時代に属している。われわれが言語形而上学、はっきり言えば、理性の根本前提をわれわれの意識にのぼらせるとき、われわれはある原始的な呪物崇拜活動に足を踏み入れることになる。意識は至る所でもろもろの行為者や行為を認め、意志を原因一般と信じる。それは《自我》を、存在としての自我、実体としての自我を信じ、自我＝実体を一切の事物に投影する——それはそうすることではじめて《事物》という概念を創造する。…存在は至る所で原因として考慮され、すりかえられている。《自我》という概念からはじめて、派生的なものとして、《存在》という概念が生じる。…端初にある大きな禍いとも言うべき誤謬は、意志が何か作用を及ぼすものであるという点、——意志が一つの能力であるという点にある。…今日のわれわれなら知っている、意志はたんなる言葉にすぎないということ。」<sup>33)</sup>

ここでニーチェは、本来一切の事物の反映をなす意識の一部を表すはずの《意志》(これは、『ツァトゥストラ』においては《重力の魔》の創造によるものであった)が言語による意識化の過程で原因一般と取り違えられている点を鋭く指摘している(そもそも《意志》を原因一般とみなすこと

は、ある結果に対して人間に責任を負わせ、ひいては《道徳的世界秩序》の概念をもって、《罪》と《罰》によって生成の無垢を濁しつづけることにもなりかねない<sup>34)</sup>。最初のもつと最後のもつ、原因と結果の取り違い、すなわち誤つた因果律ないし根拠律が、言語形而上学たる文法の助けを借りて、正当化されてしまうわけで、道徳とか宗教とかいったものは、ニーチェによれば、このような誤つた因果律ないし根拠律に依拠しているのである。

「原因と結果を混同すること以上に危険な誤謬はない。私はこれを理性の本当の腐敗と名づけている。それにもかかわらず、この誤謬は、人類の最古にして最近の習慣の一つである。それはわれわれの間で神聖視されていて、《宗教》とか《道徳》とかいった名を担っている。宗教や道徳が定義するすべての命題は、この誤謬をはらんでいる。僧侶や道徳の立法者があつた理性の腐敗の張本人なのだ」<sup>35)</sup>

アンチクリストとしてのニーチェは、ことあるごとに宗教や道徳における原因と結果の取り違いに批判の目をむけているが、それでは、キリスト教的な因果律において因となり果となるものはいかなる要素から成り立っているのであろうか。

「道徳も宗教も、キリスト教においては、現実のいかなる点でも触れ合うことがない。もつぱら空想的な原因ばかり(《神》、《靈魂》、《自我》、《精神》、《自由意志》——あるいはまた《不自由意志》)。空想的な結果ばかり(《罪》、《救済》、《恩寵》、《罰》、《罪の赦し》)。空想的な存在(《神》、《精霊》、《靈魂》)の間の一つの交渉。空想的な自然科学(人間中心的。自然原因という概念の完全なる欠如)。空想的な心理学(ことごとく自己誤解。快や不快の一般感情、例えば、交感神経のそのときどきの状態を、宗教的・道徳的な特異体質の暗号の助けを借りて解釈したもの、——《悔い》、《良心の呵責》、《悪魔の誘惑》、《神の臨在》)。空想的な目的論(《神の国》、《最後の審判》、《永遠の生》)。」<sup>36)</sup>

これらすべての要素から、「現実を贗造し、無価値にし、否定する」<sup>37)</sup>フィクションの世界が構築されているのがわかる。ニーチェは言う、「この

フィクションの世界全体は、自然的なもの（——現実!——）に対する憎悪の中に根をおろして、現実的なものに対する深い不快の表現になっている」<sup>39)</sup>と。そしてこのような世界の中の空想的な原因と結果の要素が、科学に基づく自然的因果律を逆立ちさせた反自然的因果律を、「道徳的世界秩序」を形成しているのである。ニーチェが否定するのは、この反自然的因果律や「道徳的世界秩序」であり、「原因結果の健全な概念」<sup>39)</sup>を有する科学的・自然的因果律を彼は否定しているのではない。

「『道徳的世界秩序』全体をなす罪と罰の概念は、科学を敵と目して、——僧侶からの人間の解放を敵と目して発明されたものなのだ...——罪と罰の概念は、「恩寵」、「救済」、「赦し」の教義を含めて——徹底した、いかなる心理学的現実もともなわない嘘であって——人間の原因感覚を破壊するために、発明されたものなのだ。そうした概念は、原因結果に対する暗殺行動なのだ!」<sup>40)</sup>

ここでのニーチェの、反自然的因果律についての説明は実に明快である。すなわち、キリスト教的世界における「道徳的世界秩序」全体をなす罪と罰の概念が人間の原因感覚を破壊し、科学的・自然的因果律を否定するというわけだ。そこには勿論僧侶の支配欲が秘められている。しかし、そうした暴露にもかかわらず、この反自然的因果律はキリスト教的市民道徳の中に深く根づいていて、それを掘りくずす作業は、そこに文法の問題が絡んでくる以上、至難の業である。なぜなら、原因と結果の信仰は、ニーチェによれば<sup>41)</sup>、事物を区分する言語的・文法的機能のうちにすでに確立しているからだ。この言語的・文法的機能がなければ、人間の思考は停止してしまう<sup>42)</sup>。人間の思考は文法に支配されている。従って、文法を否定しない限り、人間は反自然的因果律を完全に払拭することはできない。しかし、文法を否定するには、人間が超人にでもならない限り不可能だ。人間にできるのは、せいぜい反自然的因果律に反対して科学的・自然的因果律を主張し、認識の限界を限界として知ると同時に、そこから認識の新しい地平を切り開くことくらいである。「一切価値の転換」の一環とし



ての反自然的因果律の批判、これこそニーチェにとって神なき時代の神である《重力の魔》との戦いを意味していたのである。

#### 4. ふたたび《重力の魔》について

《重力の魔》の名は、『ツァラトウストラ』以後すっかり姿を消し、それに代わって文法や因果律の問題がキリスト教道徳との関連で執拗な批判にさらされているのだが、ただ一度だけ、それもニーチェが精神の暗闇に陥る前年(1888年3月25日)にニースで書いた、「芸術。序言」<sup>43)</sup>という標題を持つ「遺された断想」の中に、《重力の魔》の名がひよこ顔を出している。

「芸術について語るとなると、私の場合、気むずかしそうな態度はそぐわない。私は芸術については、人里はなれた寂しい散歩道で自分自身を語るように語りたい。そうした散歩道で私は時どき法外きわまる幸福と理想を、わが人生のためにひっ掴まえることがある。おのれの人生を繊細で荒唐無稽な事柄のなかで送ること。現実とは疎遠のまま。なかば芸術家、なかば鳥、また形而上学者。現実に対しては然りも否も言わず、ただ時どき上手な舞踏家のやるように、現実を爪先でそれと確かめるだけだ。たえずなんらかの幸福の日光によって擦ぐられている。憂愁の気分によってさえ、はしゃぎ出して元気を増す!——というのは、憂愁の気分は幸福な人間を温存してくれるから——。最も聖なるもののうしろにも道化の小さなしっぽをくつつける、——言うまでもないが、この最も聖なるものというのは、ある重い、おそろしく重い精神、重力の魔の理想なのだ...」<sup>44)</sup>

《重力の魔》は、ここでは芸術とは対照的な存在として名をつらねている。ニーチェにとって芸術とは、笑いを知恵に結びつけた《華やぐ知慧 (die fröhliche Wissenschaft)》を意味している。ニーチェはこの《華やぐ知慧》こそ知慧を愛する哲学者にふさわしい態度とみなし<sup>45)</sup>、また別の個所で、「そして上手な踊り手になること以上のどのような願いを、哲学者の精神は抱きうるものか、私は知らない。すなわち、舞踏はかれの理想であり、芸術でもあるのだ。きわまるところはまたかれの唯一の敬虔、かれの《礼

拜」でもある」<sup>46)</sup>とも書いている。「華やぐ知慧」においては、笑いは、宗教や道徳の根幹をなす、「重力の魔」の「最も聖なる」厳粛をこわし、舞踏はその「重力の魔」を軽快に踏み越えて行く。従って、「重力の魔」に対する人間ニーチェの優越も、ツァラトゥストラの場合と同様、このような笑いと舞踏に代表される芸術、すなわち「華やぐ知慧」の境地において現われているのである。「華やぐ知慧」の境地においては、自己の知慧を楽しむために、それとは正反対のものを演じる道化が必要となる<sup>47)</sup>。その道化にあたるのが、ここでは「重力の魔」なのだ。

「華やぐ知慧」は道徳を超えている。しかし、「華やぐ知慧」が芸術である以上、そこには言語形而上学たる文法、「重力の魔」が介在しているはずだ。なるほどツァラトゥストラは、「すべての言葉は、重い者たちのためにつくられたのではないのか？ すべての言葉は虚偽ではないのか？ 歌いなさい！ もう語ることはやめなさい！」<sup>48)</sup>とは言っているものの、ヴァーグナーともくされるあの「老いた魔術師」が言葉の霊でもある「重力の魔」(別名、「憂鬱の霊 (Geist der Schwermut)」、「たそがれの悪魔 (Abend-Dämmerungs-Teufel)」)<sup>49)</sup>に誘われて歌う「憂鬱の歌」の「痴人にすぎない！ 詩人にすぎない！」<sup>50)</sup>という文句には、不明瞭で曖昧な言葉を道具に真理を探求する詩人ツァラトゥストラへの皮肉がこめられていて、それは同時に、ニーチェ自身結局は言葉の囚人にすぎないことを、「重力の魔」の支配から完全には免かれていないことを暴露しているのである。

#### 注

- 1) KGW V<sub>2</sub>, S. 158 ff.
- 2) KSA Bd. 14, S. 256 f.
- 3) KGW V<sub>2</sub>, S. 145 (『華やぐ知慧』108).
- 4) ebenda.
- 5) KGW V<sub>1</sub>, S. 81 (『曙光』92).
- 6) Löwith: Nietzsches Philosophie, S. 44.
- 7) KGW VII<sub>1</sub>, S. 164, 4[246].
- 8) KGW VIII<sub>1</sub>, S. 8, 1[71].
- 9) KGW VI<sub>1</sub>, S. 45.
- 10) KGW VII<sub>1</sub>, S. 635, 21[3], 13.

- 11) KGW VI<sub>1</sub>, S. 45.
- 12) 1883年4月20日マルヴィーダ・フォン・マイゼンブーク宛書簡参照。
- 13) KGW V<sub>2</sub>, S. 14 (『華やぐ知慧』序文1)。
- 14) KGW VI<sub>1</sub>, S. 193 ff.
- 15) ebenda., S. 194.
- 16) KGW V<sub>2</sub>, S. 250 (『華やぐ知慧』341)。
- 17) KGW VI<sub>1</sub>, S. 195 (『ツァラトウストラ』第3部「幻影と謎」1)。
- 18) ebenda.
- 19) ebenda (「幻影と謎」2)。
- 20) ebenda.
- 21) KGW VI<sub>1</sub>, S. 196 (「幻影と謎」2)。
- 22) ebenda., S. 237.
- 23) ebenda., S. 238.
- 24) ebenda., S. 35 ff.
- 25) ebenda., S. 238.
- 26) KGW VI<sub>3</sub>, S. 72 (『偶像の黄昏』「哲学における《理性》」5)。
- 27) KGW VI<sub>1</sub>, S. 239.
- 28) ebenda., S. 242 ff.
- 29) ebenda., S. 243 f.
- 30) KGW VI<sub>3</sub>, S. 348 (『この人を見よ』「善悪の彼岸」1)。
- 31) 注10参照。
- 32) 注26参照。
- 33) KGW VI<sub>3</sub>, S. 71 (『偶像の黄昏』「哲学における《理性》」5)。
- 34) ebenda., S. 89 (前掲書「四つの大きな誤謬」7)。
- 35) ebenda., S. 82 (前掲書「四つの大きな誤謬」1)。
- 36) ebenda., S. 179 (『アンチクリスト』15)。
- 37) ebenda.
- 38) ebenda., S. 179 f.
- 39) ebenda., S. 226 (『アンチクリスト』49)。
- 40) ebenda.
- 41) KGW VIII<sub>1</sub>, S. 133 f, 2[139]。
- 42) ebenda., S. 197 f, 5[22]。
- 43) KGW VIII<sub>3</sub>, S. 9, 14[1]。
- 44) ebenda.
- 45) ebenda., S. 210, 15[18]。
- 46) KGW V<sub>2</sub>, S. 317 (『華やぐ知慧』381)。
- 47) ebenda., S. 140 f (前掲書107)。
- 48) KGW VI<sub>1</sub>, S. 287 (『ツァラトウストラ』第3部「七つの封印」7)。
- 49) ebenda., S. 366 (前掲書第4部「憂鬱の歌」2)。
- 50) ebenda., S. 368 ff (「憂鬱の歌」3)。

[原典]

- Friedrich Nietzsche, Werke, Kritische Gesamtausgabe, hg. von Giorgio Colli u. Mazzino Montinari, Walter de Gruyter, Berlin 1968 ff(=KGW).
- Friedrich Nietzsche, Kritische Studienausgabe in 15 Bänden, hg. von Giorgio Colli u. Mazzino Montinari, Walter de Gruyter, Berlin 1980 ff(=KSA).

[参考文献]

- Mazzino Montinari, Nietzsche Lesen, Walter de Gruyter, Berlin 1982.
- Dieter Henke, Gott und Grammatik, Neske, Pfullingen 1981.
- Karl Löwith, Nietzsches Philosophie der ewigen Wiederkehr des Gleichen, Felix Meiner, Hamburg 1978.
- Walter Kaumann, Nietzsche, übersetzt von Jörg Salaquarda, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt 1982.
- Martin Heidegger, Der Satz vom Grund, Neske, Pfullingen 1971.
- 氷上英廣 『ニーチェとその時代』, 『ニーチェとの対話』(岩波書店, 1988年)
- 辻本勝好 「ニーチェにおける沈黙と笑い——『ツァラトゥストラ』を中心に——」(慶應義塾大学独文学研究室研究年報第6号所載, 1989年3月)